

## 6324 ハーモニック・ドライブ・システムズ

伊藤 光昌 (イトウ ミツマサ)

株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズ会長

### 市場の要求を製品開発に反映し、新製品を拡販

#### ◆第3四半期に売上高が減少

常務 長井 啓

2012年3月期の連結業績については、売上高、営業利益、経常利益が2月に発表した予想を若干上回ったが、概ね想定通りの実績となった。なお、営業利益と比較して経常利益の増益幅が小さいのは、持分法適用会社の利益が想定を下回ったことが要因である。

前期との比較では、売上高が18億42百万円減少した。上期は震災の影響による在庫積み増し需要、中国でのロボット需要の増加などにより過去最高水準となったが、第3四半期に入って失速した。これは、欧州経済の先行きが不透明であったことから中国での設備投資が軟調になったことが要因である。営業利益が15億14百万円の減少となったのは、減収および固定費増加の影響である。固定費については、昨年5月に長野県にある主力工場の生産能力増強投資が完了したことに伴い、減価償却費、リース費用が増加した。この結果、経常利益も15億65百万円減となった。設備投資額は17億62百万円であり、リース物件を含めると約30億円となる。研究開発費は前期比で52百万円増加した。

主要グループ会社の状況としては、米国のハーモニック・ドライブ・エルエルシーでは、主要な用途が半導体関連、航空・宇宙関連であるため、米国の予算が削減された影響を受け、前期比で減収となった。また、円高の影響により、日本からの原材料・製品の仕入れコストが増加したことが収益を圧迫した。ただし、最近では、米国の民間企業がスペースシャトルの打ち上げに成功しており、将来に期待できる。

ハーモニック・エイディは、遊星減速機の製造を行っている。遊星減速機そのものは一般的な動作原理に基づくものだが、同社ではバックラッシが非常に小さい高精度な遊星減速機を製造している。当期は、モーターメーカーに納入するギアヘッドビジネスがやや減少となったことに加え、フラットパネルディスプレイ関連の需要が減少したため前期比で減収となった。

持分法適用会社のハーモニック・ドライブ・アーゲー(ドイツ)は、EC域内の多岐に渡る産業に製品を納入している。当期はロボットに加え、工作機械、航空・宇宙向けが比較的好調であったことから増収となったが、ユーロ安によって仕入れコストが増加したため減益となった。

#### ◆産業用ロボットの落ち込みが影響

単体業績については、連結と同様の要因により減収減益となった。売上高は下期に大きく減少し、特に産業用ロボット向けの減少が大きな要因となった。フラットパネルディスプレイ製造装置向けは、中国において大型パネル向け投資が低調だった関係で低水準となった。

単体の営業利益は35億76百万円(前期比19.1%減)となった。増加要因としては、プロダクトミックスによる限界利益率の改善で99百万円の増益となった。当社の製品は、サイズや種類によって採算性が異なるが、当期は比較的当社に有利な構成になったことが寄与した。販管費の減少は91百万円となり、業績連動賞与の減少、退

職給付費用の減少がその主な要因である。一方、減益要因としては、減収影響が7億41百万円、設備投資に伴う製造固定費の増加が2億94百万円となった。

連結バランスシートでは、総資産が355億43百万円(前期比12億75百万円増)となった。内訳としては、現金が増加した。これは、世界経済が読みにくい状況となり、事業環境が急変する可能性に備えるため長期借入金を調達し、手元流動性を高めたことによる。売上債権は減収に伴い減少した。有形固定資産については設備投資の実行により増加した。投資その他の資産は減少しており、これは投資有価証券の時価評価が低下したことが要因である。

負債については、長期借入金の調達により有利子負債が増加した。純資産については、当期純利益の計上により利益剰余金が増加した。自己資本比率は前期の64.6%から63.9%に低下したが、これは負債の増加率が純資産の増加率を上回ったためである。

営業活動によるキャッシュ・フローは24億76百万円と前期比で減少したが、これは納税額の増加、税金等調整前当期純利益の減少が主な要因である。投資活動によるキャッシュ・フローは59億9百万円のアウトフローとなった。これは、設備投資の実行や借入資金の定期預金への振替により、支出が増加したことによるものである。財務活動によるキャッシュ・フローは長期借入金の調達が主な要因となり、32億95百万円のインフローとなった。

### ◆2013年3月期業績予想

2013年3月期の連結売上高は204億円(前期比1.2%増)を見込んでいる。引き続き産業用ロボットが牽引役となるが、北米では、半導体関連、医療機器が比較的好調に推移すると見ている。営業利益は44億円(同1.5%増)を見込んでおり、増収効果はあるものの、固定費の増加やドル安が続くことによる米国子会社の収益低下を加味して微増を想定した。設備投資についてはほぼ例年並みを計画している。前期で大型投資は完了したが、今期は新製品の量産対応に向けた金型等の投資を行う予定である。研究開発費については、新製品の開発が当社の生命線であることから引き続き傾斜配分していく。

主要グループ会社の見通しとしては、ハーモニック・ドライブ・エルエルシーは、半導体、医療機器などを中心に、堅調に推移すると見ている。ハーモニック・エイディでは、更なる製造の合理化、経営改革を進めている。ただし、当社との内部取引に係る仕切りを見直すことにより、当期は減収を見込んでいる。ハーモニック・ドライブ・アーゲーでは、工作機械やロボットは引き続き堅調に推移するが、EC域内の政府関連プロジェクトの減少を見込んでいることから減収を予想している。ただし、利益は増加する見通しである。

当社単体では、売上・利益ともに微増を見込んでいる。用途別には、半導体製造装置は、昨年夏から軟調となり8月にはボトムとなったが、年末にかけて微細化の投資案件が増加したことで回復傾向にある。フラットパネルディスプレイ製造装置は、中小型パネル向けの案件はあるものの、大型パネルの生産能力に過剰感があるため、ほぼ横ばいで推移すると見ている。産業用ロボットは、自動車関連や中国をはじめとする新興国の自動化で増加を見込んでいる。

単体の営業利益は37億20百万円を見込んでいる。増加要因としては、増収効果で1億24百万円を予想している。製造固定費は50百万円の減少を見込んでおり、新製品開発のために金型投資などは行うが、生産能力増強効果により残業が減少する見通しである。減少要因としては、売上増に伴う梱包発送費の増加、業績連動賞与の増加、研究開発費の増加などにより、販管費が30百万円増加する見込みである。

## ◆技術と技能のスパイラルアップ

会長 伊藤光昌

当社は、過去 5 年で 2 つの大きな事業環境の変化を経験したが、その過程で大切なことを忘れた気がしてならない。お客様が求める製品を短期間で製造供給することだけが目的となり、中長期的に大切な、研究開発やイノベーションを二義的にしてきたのではないかという反省である。有する製品や接する市場の性格から、辛うじて研究開発を主体とした体制を維持してきたが、大勢に流されてきたきらいも否めない。そのため、再度、研究開発に重きを置き、イノベーションを目指すことを目的とした中期経営計画を策定した。

1955 年に生まれた歯車「ハーモニックドライブ®」は、未だに無限の開発要素を内包した製品であると考えている。金属のたわみを利用した独特の動作原理が故に、デジタル技術では容易に解析やコピーをすることが難しく、たゆまぬ技術の研鑽と技能の追求が欠かせない。創業当初は用途が見つからず 10 年近く暗中模索の時期が続いたが、1970 年代の後半になって、資源を持たない日本では、重厚長大のモノづくりから、より小さく、より軽く、より力強く、かつ精密へと価値基準が変わってきたことで、時代の要請として精密減速機を含んだ精密制御市場が興ってきた。この市場は爆発的な伸びはないものの、着実に拡大を続けており、今後も用途によって更なる拡大を見込むことができる。

中期経営計画の基本方針では、まず品質と安全を事業運営の基礎に置く。また、市場の要求を真正面に受け止め、それに応える企業グループでありたいと考えている。そして、市場の要求を製品開発に反映し、新製品を拡販していく。以上の方針の下、主要製品である減速機とメカトロニクス製品の競争力強化を推進していく。

当社は創業以来、技術開発とそれを具現化する技能の蓄積によって製品ラインアップを拡充してきた。今後も地道な基礎理論研究、材料開発、生産技術開発、耐久試験などを繰り返し、技術と技能のスパイラルアップを目指していく。

減速機については、「より大きな力を、より小さな容積で、より軽く、より精度良く」という着眼点で基本性能の向上を図り、同時にその性能を最大に引き出す周辺部品の開発を進めていく。メカトロニクス製品については、さらに多くの技術要素を必要とするため、お客様の多様なニーズに対応しながら競争力を引き上げていきたい。以上により、2015 年 3 月期の連結売上高は 260 億円を目指す。

当社は、精密制御分野において、「トータル・モーション・コントロール」という価値を提供している。今後も減速機、モーター、ドライバー、センサー、コントローラー、その他のシステム要素において高いレベルの精密制御を実現し、お客様にタイムリーに高付加価値製品を提供していきたいと考えている。

(平成 24 年 5 月 23 日・東京)